2023年8月

先月の課題本『思い出の作家たち』につないで

◆◆◆8月の読書会から

8 月の読書会は，恒例になっている「本をつなぐ」読書会でした。

7 月の読書会の課題本ドナルド・キーン氏著の『思い出の作家たち 谷崎・川端・三島・安部・司馬』を読んで今もなおキーン氏の心のなかに生きている五人の作家からそれぞれが一人の作家とその作品を選んで課題本に「つなげ読み」をしました。

会の最初に選んだ作家ごとに分かれてなぜその作家を選んだのかを話しました。その作家について知っているエピソードなども話しました。キーン氏のように直接会うことはできませんが，本を通してそれぞれの作家の考え方，生き方を読み，語り合うことで自分の思いが少しずつはっきりしてきたのは私だけではないと思います。

会員同士で選書が重なった本もありました。紙上参加もあり，それぞれが選んだ作家や作品についての見方や考え方が広がったのではないでしょうか。語られた本を 8 月の読書会の報告として紹介します。

（出版社に許可を取る時間がありませんので，本の映像は載せていません。）

作者・著者	著 書 名	出版社
谷崎 潤一郎	卍	新潮社
谷崎 潤一郎	刺青	新潮社
谷崎 潤一郎	蘆刈	岩波書店
谷崎 潤一郎	少将滋幹の母	青空文庫
谷崎 潤一郎	台所太平記	中央公論新社
谷崎 潤一郎	陰翳礼讃	中央公論新社
川端 康成	美しい旅	実業之日本社
川端 康成	天授の子（故園含む短編集）	新潮社
三島 由紀夫	金閣寺	
三島 由紀夫	午後の曳航	新潮社
司馬 遼太郎	街道をゆく 南蛮のみち Ⅰ	朝日新聞社

※安部公房の本がなかったのは残念でした。

（文責：伊達）

「　三島由紀夫の燃やしたもの　――『金閣寺』」

吉川　五百枝

ドナルド・キーンが『思い出の作家たち』として並べたのは、かつて私もそれぞれの作品のいくつかを読んだ事のある作家達だ。今月は、その中から 1 人の1冊を選ぶのだから、誰のどの作品にするかをきめるのは難しかった。

ドナルド・キーンのこの作品を特徴付けるのは、自身を含めて同時代人としての世の中の見方を書く事ではなかったかと思う。司馬遼太郎 1923 年生まれ、安部公房 1924 年生まれ三島由紀夫 1925 年である。

昭和元年に生まれ、終戦の昭和 20 年に 20 才になり、昭和 45 年に 45 才で自決した三島由紀夫を、その中でもとりわけ象徴的に感じて取り上げることにした。

近代文学と言われる「小説」が日本に定着し、とりわけ、身近な出来事を誠実に書いていく「私小説」が日本文学の主流となっていたが、そこに、伝統的な「私小説」ではないのに、フィクションとして構築された告白文芸が三島によって発表された。『仮面の告白』(昭和 24 年、24 才)である。以来、三島が多才な活動を始める。

三島は、「文芸作品は時代を表現し、時に異をとなえ、あらたな歴史のヴィジョンを提示すべきもの」ととらえていた事が見える。

昭和 31 年『金閣寺』を発表した。

高度経済成長が大きな渦を作り始めた時期だ。世間は、なにかしら前途に輝かしい進歩発展や豊かな経済が開けてくるような気分を漂わせていた。だが、その気分の高揚の中で、後民主主義を謳歌するメディア的表層と、敗戦を引きずる埋み火のような底層が、人々を複雑な境地にしていた。

『金閣寺』は、三島が書きたかったその時代の空気について、実際に起きた事件がフレームを提供した。

ドキュメンタリーは、調査を重ねて眼前の事実を後追いするもの。三島の『金閣寺』は、初めから事件を模したフレームを用意し、その画面の中で動きを創作するもの。

事実として、昭和 25 年 7 月 2 日未明、京都鹿苑寺舎利殿金閣は、他の仏像 6 体と共に放火によって炎上消失した。放火犯は、鹿苑寺(金閣寺)に僧籍を置く大学生、林養賢 21 才である。放火した後すぐ裏山に逃げ、カルモチンを服用して胸に短刀を当てたが死にきれず、裁判の結果刑期 7 年を宣告され収監された。昭和 30 年恩赦を受けたが、統合失調症と肺結核により釈放後 6 ヶ月で亡くなった。26 才だった。

三島は『金閣寺』を昭和 31 年に発表した時、この放火事件を骨格にして主人公、溝口(私)という人物をつくりだした。ドキュメンタリーではなく、虚の人物の登場である。そして、一人の人間の行為ではあるけれど、観念が形を取ったとも言える「私」の独白が、精神の疑問や納得として続く。林養賢と似た生い立ちで、吃音も持たせ、修行僧となって放火して逃げ出すまでの溝口の観念を積み上げていく。

事件として林養賢の供述調書には、彼の動機は「金閣寺」という美に対する嫉妬、美しい物を見に来る有閑人への嫉妬であると載っている。だが、林養賢が警察で語る動機が、その心の中で蠢く全てを理路整然と語り尽くしたわけではないだろう。吃音を持って生きていく屈

辱と誇りなど、語り得るものではなかったに違いない。林の姿を借りた溝口（私）が、この世相で行為としてどう生きたのか、何を考えたのかを語っていく。

三島は「小説というものは無際限かつ無道徳な人間的関心に成り立つもの」と言っている。小説という“嘘”の許される中で、その時代を生きる人々の心の表層も低層も表出したかったのだ。たぶん、小説の題材は「金閣寺」でなくてもよかっただろうが、金閣炎上事件は、三島が自分の芸術的野心を切り刻んで表すには格好の材料だったことは想像がつく。

500 年を越えて人々が美しいと認めた侵しがたい伝統の佇まい。金という最高の美しさと、その有価価値。

それは同時に、伝統という束縛に悩む人には煩わしい存在であるし、全てを金銭的価値に置き換えることに反感を持つ人には、在ることが目の邪魔になる存在。

かつて、私も「金閣寺」の近くにいて、何度も通り取り過ぎた事がある。その時に美しさと悩ましさの天と地ほどの違いを感じていた。雪によってきらびやかさを鎮められた金閣寺に、天地の差が縮まって、ほっとした記憶の冬があった。「現実の金閣寺」と「観念上の金閣寺」は違う。自分の物にはならない美しい物にであったときに感じる恍惚と苦痛。三島ノートには、「美への嫉妬」とある。

小説家の三島は、溝口（私）に様々な条件を組み込んだ。

辺鄙な貧しい寺の生まれ。生来の吃音。父は金閣寺を尊崇する病弱な僧侶。倫を外れた母。修行する金閣寺での同輩鶴川、級友の柏木が外界との通路の持ち方を教える。女犯する師の背信。女性と関係を持とうとするたびに立ちはだかる金閣寺。

こうして、小説では、次第に「金閣寺」が美の観念の頂に登る。

三島が「金閣寺」の美を表現する言葉は、溝口（私）が火を藁束にうつすまでのあいだも建物の各部の描写で丁寧に語られる。〈美は、これらの各部の争いや矛盾、あらゆる破調を統括して、なおその上に君臨していた！〉「美しい」とは、こんなにも言葉をつかうのかと、数ページが読み飛ばせない。

火をつけようとする溝口（私）は、臨済録示衆の言葉によって鼓舞される。

『仏に逢うては仏を殺し、祖に逢うては祖を殺し、羅漢に逢うては羅漢を殺し、父母に逢うては父母を殺し……』というあの言葉を思いだして全身に力が溢れた。

先人の観念を是とせず、乗り越えろ。疑え。絶望せよ。その先に光あり。解釈は人によってさまざまだが、もちろん臨済禅師が「殺せ」と勧めているわけではない。

全てを手放すことによって光（成仏）は見えてくるということだ。三島作の放火犯は、裏山で燃える「金閣寺」を感じながら、煙草を飲んで「生きよう」と思うのだ。観念上の「金閣寺」は燃やされた。だが、そこに生きなければならない「私」はいる。

戦時中、「人生 25 年」と思って死ぬつもりだったのに、敗戦によって混乱のうちに生きねばならなくなった世代が煙草を飲んでいる。

三島が次のヴィジョンを示した作品を手渡したのは、自決の日だった。

『思い出の作家たち』につないで

◆【 YA 】

『美しい旅』初版 実業之日本社 1942 年

川端康成（1889--1962）

『美しい旅』を読んだのは、もう半世紀以上も前の事。多分小学校 6 年生くらいだったのかと思う。『美しい旅』はかなり厚みのある単行本で、表紙に可愛い女の子の絵があったように思う。勿論その時は、作者も知らず、作品の背景も知らず、ヘレン・ケラーも知らなかった。主人公の小さな女の子が盲聾であることが私には驚きとドキドキする事だったのだろう。盲聾と言う事も初めて聞く言葉だったに違いない。

近所の小 1 から 6 年の中に、2 人とも筋ジストロフィーの兄弟がいた。兄は重症で杖と木製の乳母車のような物を使いながら、みんなと同じ様にボール投げしたり、当てっこしたり必死で遊んだ。

花子は違う。目も見えなくて耳も聞こえない。どんなにして遊んだのか、どのようにしていたのかと、不安だった。

母親と花子の 2 人？だけの生活の記憶があり、姉のような女の子とその弟が何かと寄り添って見守ってくれ、その後聾学校の先生と出会う。もう一人の女の子も登場していたと思う。流れはあったが、どんな結末になったかは、わからない。

私は夏山登山が好きで、日本アルプスに幾つも登った。2 回目の大山登山の時、中学生くらいの女の子とお母さんが登っていた。お母さんがしきりと女の子に声を掛け、女の子もその掛け声に答え、二人は杖のような 1 本の棒を持っていた。ハッとした。

女の子は目が見えなかった。6 合目、7 合目は結構険しい登山道だ。危険と思われるが、二人は懸命に登っていた。夫と私はその後も何かにつけて思いだし、話に上った。

ドナルド・キーンが川端康成の作品や人物像を述べていたなかで、『美しい旅』は無かったが私にとっては、小さい頃に読んだ忘れ難い本の 1 冊になった。

今思えば、少女雑誌に盲聾の小さな女の子が主人公で、しかも戦中に連載が始まったのか、初めて来日したヘレン・ケラーとひょっとして会われていたのかと、色々と思い巡らすことになった。

◆【 TK 】

『故園』（川端康成）を読んで

有名なのになぜか先に映画を見てしまっている川端康成の作品の数々。

今回は川端の生い立ちについて自伝の作品があったのでこれを選びました。

幼くして両親と祖母を失い 10 代で祖父もなくしている。

悲しすぎるのでどういう生き方をしたのかと思ったのです。父親は医者でしたので経済的には困らなかったようですが、周りの人が思うほど悲劇の自分とは全然感じていないのです。そして作家としての天才の悲劇とも感じていないのです。

私も見習いたいと思ったのが、無いものに目をとめるのではなく、今持っているものに目を向けていたそうです。

前向きですが、作家として自殺の結末は悲しすぎます。

私の好きな作品『女であること』は女について描かれていますが、どうしてこんな女言葉が書けるのか？と不思議に思うのです。

川端は日本の美について論じていますし、本もだしています。昔はエンターテイメントとかテレビラジオも数が少なかったのもあったせいか日本の美にじっくり目がむけられたのだと思います。

山を見ても駅をみてもすべてが情緒いっぱいの表現が好きです。川端の文体が私の原風景のようになっています。

川端の作品が図書館では少なくて探しにくいというのが残念です。これからも少しずつ他の作品を読みたいです。

◆【 T 】

『天授の子』(川端康成著)を読んで

私(主人公)45 才のとき養女として民子をむかえた。民子は、12 才まで母と暮らし、その後迎えに行って三人の生活になった。三人の生活は表面上は穏やかな日々であった。

民子は、幼いころから、叔父さん叔母さんにもらわれていくのだと言い聞かされていたので、母と別れるとき、泣くこともなかった。もちろん何も感じないことはないが、それを自分の運命として受け入れざるを得なかったのではないだろうか。それから 7 年間両親とも姉たちとも会うことなく過ごしたが、実母が危篤という電報を受け取り、実母に会ったとき、『固く座ったままで、体を動かさず、顔もほとんど下向けず、ただ大粒の涙の流れるに任せていた。』それを見て、私(主人公)は、民子の実母への愛情・私の家での民子の悲しみを感じるのであった。

民子の悲しみについて、『民子が私の家に来て苦しみ悲しんだとしても、それが愛情から出たものであれば、民子の心の糧であって、私はさほどこだわらない。そこから人を許す心も育つだろう。…』と書いている。苦しみをなくす、悲しみをなくすのでなく、苦しみ悲しみを感じている民子に寄り添い、それら心の糧として、成長していってほしいという作者の大きな愛情を感じる。

私(主人公)は民子について、『民子が私の養女になって、満足しているか、不満でいるか、幸せに思っているか、不幸に思っているか、私は探ってもみなかったし、気にもやまなかったのは、私たち三人の性質にもよるのだろうが…』『民子をもらうのに…一宿一飯の縁でもよかった。無常の世は所詮一宿一飯の縁だ』『私が早く死んで、孤児となっても、子には子の

生がある』と思っていた。川端康成自身 2 才で父を亡くし、続けて母・祖母・姉を亡くし、康成が中学 3 年の年には祖父をも亡くしていて、人の転変をあるがままに受け止めて生きざるを得なかった。そうやって生きてきた康成らしい言葉だと思った。

私（主人公）の妻が、民子を連れて東京の有名な易者に行ったとき、民子について聞きに行ったわけではではなかったのだが、易者は民子のことを、「天授の子」と言った。折に触れて、この言葉を思い起こし、民子は私（主人公）夫婦にとって、本当に「天授の子」だったのだと思う。

◆【 JM 】

『刺青』『卍』（谷崎潤一郎著）を読んで

今まで谷崎潤一郎の本は若い頃に「春琴抄」を読んだくらいである。なんとなくエロチックな印象で避けてきた。しかし、この歳になると恥ずかしいことも怖いこともない。いい機会だと思い、読んでみようと谷崎を選んだ。作品は本を手にとって決めようと広島の紀伊國屋書店へ行ったが、選んでレジに持っていく時、少しドキドキした。この期に及んで、小心者である。

まず「刺青」から読み始めた。わずか 12 ページの短編で、谷崎にとって小説としてはデビュー作である。テンポよくサクサク読める。これは講談の語り口だと気付いてからは、頭の中で神田伯山が語ってくれていた。

刺青に命をかける彫り師が駕籠の簾のかげから覗く少女の足に惚れ込み、1 年後に出会って少女を薬で眠らせ女郎蜘蛛を彫っていく。「犯罪ではないか」と思うが、少女は刺青後おとなの妖しい女へと変貌する。こうして筋をたどると無理があるが、読んでいてその世界に揺蕩うことができる。筆の力だと思う。これを発表した時谷崎は 24 歳、老成している。

読んでいて気になったのは脚注の多さである。多いところでは 1 ページに 15 もの脚注がついている。「御殿女中」「花魁」「草双紙」「刺青」「博徒」「鳶」・・・私の年代では分かるが、若い人には分からないということか。大正時代や昭和初期の作品は、もはや古典なのである。

次に読んだ「卍」は絶対的な美をもつ光子に憧れ、深みにはまっていく女を描いている。その女には夫がいるが、女に会うため嘘に嘘を重ねる。こうまでして会いたいのか、嘘が露見した時のことなど考えず、後先もなく突き進んでいく情熱には恐怖さえ感じ、共感できない。

しかし、これを 1 人の女の大阪言葉の語りで綴られると、妙に艶めかしく、ゆるゆると沼に落ちていく感覚になる。家事やお金の算段などもせずともよい別世界の沼である。

光子には別れられない男がいて、まさに「卍」状態。糸が絡まり、どんどん深みにはまっていく。

谷崎が 1928 年 42 歳の歳に発表された作品であるが、谷崎は関東大震災（1923 年）後に関西に移っているので、この作品はわずか 5 年足らずの関西生活の中で書かれている。それにしては大阪言葉が巧みである。言語感覚の優れた人であると思う。その言葉だけで、関西の上流家庭の奥様の、我々の常識とは違う世界に連れて行ってくれる。

読んでみて「食わず嫌い」だったと思う。エロチックで、難しそう・・というイメージは覆された。他の作品も読んでみたい。

◆【 N2 】

『午後の曳航』(三島由紀夫著)を読んで

今月の読書会は、先月の課題本でドナルド・キーンの書いた五人の作家の中から、各々が作家を選び読み深めるということでした。

三島と安部と司馬は終戦時に二十歳代前半で、戦中戦後に多感な青春を過ごしています。その三人の中で、三島由紀夫を選びました。三島が作家として活動し始めた頃、当時十代の私は「仮面の告白」を始めとして、次々発表された作品の題名から「こんなのを読んで良いのかしら」と思い、理解することも難しく馴染むことが出来ませんでした。

この作品「午後の曳航」は 1976 年に作品が日米合作で映画上映された後初めて小説を読んでみました。

横浜元町近辺の夏の強い光から第一部が始まり、第二部の冬は最後に悲劇を予想させるところで終わっています。第一部で登は竜二を英雄として憧れ、理想の船乗りであると好意を寄せていますが、第二部では竜二は陸に上がり登の父親となり、俗な者に変わってしまった、裏切られたと感じてしまいます。その裏切り行為を罰してもう一度英雄にする為にと首領は猫の時と同じような処刑を提案し実行に移そうとします。戦前特に父親という名の支配力と権威のあった者が、戦後社会でのその存在の難しさ(厳しくしても嫌われる、優しくしても疎まれる。どういう態度を取るべきなのか。どうしてこれほど嫌悪されるのか)を感じました。

この物語は夏に始まり冬に終わるのですが、これは戦前と戦後に置き換えられると思います。大義(海)の為に命を賭ける職業としての船乗りが、平凡(陸)な暮らしに安住することは、命を駆けて死と栄光に立ち向かうこと(戦争)を放棄した姿であり、これを堕落と考え少年達には死刑に値する罪と捉えられたのでしょうか。子供達の首領は三島がモデルとも思えます。首領は一人ぼっちの青年で世界の圧倒的虚しさに関する考察が残酷な行為へと繋がっているようです。この本を読んだときの猫を殺す場面の描写には読むに堪えない気持ち悪さを感じたのですが、物語の上だけではなく現代にこのような事件が実際に起ったことも事実です。

この長編は舞台の景色、感情の揺れ動き、子供の心理、大人の思い、等々様々な描写に筆が割かれ無駄がありません。

三島の他の作品とはすこし違うこの作品を、読書会の機会を得て再度読んだのですが、読むたびに新しい気付きがありもう一度読み返したいと思います。

◆【 望月悦子 】
『少将滋幹の母』(谷崎潤一郎著) を読んで

7 月の吉川先生の感想文には圧巻といいましょうか感動しました。益々谷崎のフアンになりました。引用させていただきます。

「著者(ドナルド・キーン)が、36 歳年長の谷崎に見たのは、『美しく同時に冷酷なわがままな女』『気品があり、洗練された物腰の日本の伝統美を具現した女』を描く才でした。そのような女人を理想の女人として登場させれば、隷属的な崇拝を旨とするマゾ、サドの人物を配することになります。憧れる美は、爛熟、野性をモットーにしたアブノーマルな人間模様賭してくりひろげられます。谷崎は、もともと西洋かぶれでならしたものの、昔ながらの和に惹かれ、日本回帰の方向をもちました。哲学を語ったりせず、倫理的でもないし、政治的でもなし、世間知や罪悪の分析をせず、と著者は言います。しかし、1943 年、戦時下の風潮に抗して執筆を取りやめることもしています。そうした谷崎の精緻な文は、〈永遠不変な事象の反映〉を小説の中に残すことだったと著者は見ています。マゾもサドも、永遠不変の人間の事象を描いたのだろうと、改めて「文学」の意味を私は感じました」谷崎の本質を見ないで、マゾ、サド、好色作家とレッテルを張るのは危険であり、先生もおっしゃるように文学を読んだことにならないのではないでしょうか。何の予備知識もなくこの本を読んでみたいと思ったのです。

この作品は 1950 年 8 月の初版、谷崎 64 歳に書き上げたものです。敗戦から5年経過したまだまだ混沌とした時代です。戦時下取り組めなかった「細雪」がベストセラーとなり昔の懐かしい豊かな生活を切望していた時期でもあったようです。

この作品は、『今昔物語』が伝える史実をもとにして構成されています。物語の展開は、高齢の大納言藤原国経(78・9 歳頃)の美しい妻・北の方(20・1 歳頃)を若輩の左大臣藤原時平に奪われる。「少将滋幹の母」とはこの北の方のことで、「少将滋幹」とはその北の方が国経との間に設けた一子・左近衛少将藤原滋幹(7歳位)のことですが、谷崎は彼より母親の北の方に焦点をあて、彼女に関わるさまざまな男たちを描いています。面白かったのは、平中(右大臣平貞文のことで『平中物語(159 首の和歌を含む全 39 段の和歌説話。作中の和歌のうち 99 首は平貞文の作))は他の女官たちが憧れるほどの美男であっても、類い稀なる絶世の美女である北の方が、簡単にはなびかないと思わせる場面です。「通い婚」であった平安時代、男性がハードルの高い女性に近づくには並大抵の努力では成立しない。何度も文を出すのに返事ひとつなし。或る時「見たら見たらでいいから返信をくれ」と懇願すると平中の書いた「見た」の箇所を破って返信したとある。薄明りの中での逢瀬を楽しんでいた王朝の女性たちの五感と知恵の磨き上げには敬服します。また、谷崎は当時の状況を記した文献(大和物語、世俗物語、今昔物語等)から史実をうまく取り入れながら構想がねられていることがわかります。北の方のかつての恋人であった平中の苦悩について記されている場面。時の権力者である左大臣時平は、あの手この手を使って自分のものにした北の方を厳重に警戒して誰にも合わせないようにしていた時、唯一当時 5 歳であった息子の慈幹だけは乳母に連れられて会うことを許されていた。平中はその機会を窺い、咄嗟に滋幹の右腕の衣に和

歌を書き彼女に送っている。「うつ々にて誰ちぎりけん定めなき夢路にまよふ我は我かは」そして彼女も返歌を息子の左腕の衣に書いて「これをその方にお見せ」と。紙がないから書けないなどと豊かな時代に育つ我々には真似できない。平安王朝時代の女性たちの豊かな激しい情熱や知恵にはいつも感心させられます。さらに、平中は、奪われた北の方を忘れるために彼女の排せつ物を見ることで、他の人と何ら変わらないことを見届けると一遍で嫌気がさすだろうと彼女のことを吹っ切ろうとする場面。現在幼児が使っている「おまる」のことを今昔物語では「はこ」と記録され、「召使は『はこ』を香料の布に包み，紅い色紙に絵を描いた扇で差し隠しながら・・・普通の「はこ」ではなくて金色の漆の塗ってある上等な「はこ」・・」と。さすが貴婦人が使用するおまるは違うのだと感心しながら読み進むと、さらに具体的に「親指くらいの太さの2・3寸の長さの黒っぽい黄色い固形物は沈と丁子と甲香と白檀と麝香と煉り合せて作った香のにおいにそっくり」だとか「よくよく舌で味わいながら考えると尿のように見えた液体は丁子を煮出した汁であるらしく、糞のように見えた固形物は野老（ところ）や合薫物（たきもの）を甘葛（あまずら）の汁で練り固めて大きな筆のつかにいれて押し出したもの（要するに現在の心太）」などなど北の方の世界ではなんと風流で機知にとんだ趣向を凝らすのかと。ドナルド・キーンが谷崎の〈永遠不変な事象の反映〉を小説に残すと評価するのはこういうことなのかと。人間にとって生きていくためには欠くことのできない排泄を今昔物語からヒントを得て見事にしかも具体的で美しく表現しています。さらに死についても取り上げています。

谷崎は、北の方を「すぐれてめでたいご器量であられることは、先ず本当でございます」とどこまでも空虚でつかみどころのない存在とすることで、周囲の男達との言動の浅ましさを際立たせ彼らの情や欲・色などを浮き彫りにして表現しています。

王朝時代の男女関係（伊勢物語然り）には、現代の自分には驚くことが多いのですが、今回も驚愕したことがあります。

「この引出物はたしかに頂戴しましたぞ」。時の権力者である甥の左大臣（時平は国経の弟長良の三男。二人は叔父・甥の関係ではありますが、時平は摂家の正嫡。彼の方が国経より位は上）への貢物として、美しい若妻を捧げているのです。息子の滋幹にとっては位の高くなっていく母との思慕はどうなっていくのでしょうか。美しい妻を譲った国経は、美しい人でも死んで骨になればだれでも同じと、妻への思いを断ち切るために不浄観を養うべく腐乱死体と向き合い死に至っていますが、時代を反映しているとはいえ、「老い」と「死」についてここまで描写するかと。谷崎は色恋だけでなく人間の本質を追求しているのだと思いました。宗教界の教えも受けたようです。この作品を完成させるために「今昔物語」「平中物語」「後撰集」「十訓抄」などから逸話を取り入れ物語として肉付けしているようです。谷崎の学識に心底魅了されました。やっぱり最後には、60 歳になった滋幹が尼になっている滋幹の母（北の方）に対する追慕に焦点をあててくり広げられ場面圧巻です。永遠不変の人間の事象を十分に読みとれました。

◆【 MM 】
『台所太平記』(谷崎潤一郎著) を読んで

・なぜこの本を選んだか
もう終了してしまったが、ラジオで毎週読書会をしている番組があった。小川洋子が出ていてその番組の聴くのが好きだった。そこで取り上げた本で読んだ作品もいくつかある。この『台所太平記』を扱っている回があった。私はいつも放送を聴いてから面白そうだと思って読む、という追いかけをしていたのでこの本を図書館で借りた。が、その時は最後まで読まずに終わってしまった。それは1年前のことだったけれどずっと気になっていて、谷崎潤一郎のイメージが変わった印象があったので今月はこの本を選んだ。

・『台所太平記』とはこんな本
昭和37年(1962)から半年間、サンデー毎日に連載された小説。それを1冊にまとめた単行本が1963年に中央公論社から出版。文庫が1974年に同じく中央公論社から出版。谷崎潤一郎は1965年没。
～あらすじ～
特技はお料理、按摩、ゴリラの真似。曲者揃いの女たちが、文豪の家で元気にお仕事中！珍道中と笑いが止まらぬ女中さん列伝。

私が読んだ文庫は2021年に改版発行されたもの。ユーモラスな挿絵が読んでいてさらに楽しくさせた。小説の体はとっているが主人公磊吉＝谷崎潤一郎。挿絵が楽しい改版文庫本でぜひ読んでいただきたい。だって磊吉がうさぎのかぶりものをしていて谷崎潤一郎そっくりに描いてあるのだ！

・『台所太平記』を読んで
この本を読むまでの谷崎潤一郎の印象は独特の世界観(変態的な)をもった作家。女性の脚が好き、女性が好き。代表作をきちんと押さえていないのでこのような偏見を持っていた。
この本を読んでみて、印象はがらっと変わった。ユーモラスに愛情をもってお手伝いさんたちを描いているではないか。これほど次から次へ個性豊かな人たちが集まるもんだ、と驚いたが、作者の観察眼も素晴らしいしそれぞれのエピソードを面白い小説に変える才能は見事としか言えない。彼女たちが作るお料理の描写も読んでいて頭に浮かんでくるほどおいしそうだった。谷崎は女性の脚が好きという印象があったが、ここでも脚のことは言及されていた。しかし、この作品の中では磊吉＝谷崎が好きなのは清潔感らしい。足の裏がきれいな女性が好ましい。清潔感(身なりや仕事ぶり)がある人が好感がもてるとあった。それから、気を遣わずものを言う人が一緒にいて楽しい、というのは文豪ならではと感じた。
たくさんのお手伝いさんが来たが心底嫌いで追い出してしまった人はたった一人。その人のどこが嫌いか、のくだりも「こんな風に言う人(お手伝いさん)いたら嫌じゃわ」と読んでいて感じるくらい嫌な女に書かれていた。読ませるのが本当にうまい。
長い人は20年くらい勤めたり、辞めたあとも子供たちを連れて寄るようなお付き合いが続く

など、家族同然の付き合いが続くお手伝いさんも少なくない。彼女たちから見ても磊吉は面白いおじいさんだったのではないか。

谷崎作品がこんなに楽しくて読みやすいとは思わなかった。雑誌に連載されていたのでいろんな人に読み易くしてあったのだろうが、谷崎に対する苦手意識が消えたので他の作品もぜひ読んでみたいと強く思った。